

# この日 母を奪った原爆

原爆投下から七十年。広島は六日、慰霊の日を迎えた。原爆は広島で十四万もの人命を奪い、生き残った者に今なお放射能被ばくの苦しみを与え続ける。最愛の母を失った女性は高齢を理由に「これが最後」と決めた平和祈念式典に臨み、子どもたちは核兵器の廃絶を世界に訴えた。「安らかに眠って下さい。過ちは繰返しませぬから」。原爆死没者慰霊碑の言葉をこの日、多くの人々が心に刻んだ。●面参照



愛知県の遺族代表として平和祈念式典に参加、犠牲となった母の冥福を祈る小西正子さん（6日午前、広島市の平和記念公園で）小西さんの母ハルノさん

あの夏、何度母の名を呼んだことだろう。愛知県の遺族代表として六日の平和祈念式典に出席した名古屋市長の小西正子さん（6日午前、広島市の平和記念公園で）は、四十九歳で原爆の犠牲になった母ハルノさんの遺影を膝に取られた。

## 名古屋の女性 昨年やっと「最期」分かる

平和記念公園には未明から多くの人が訪れ、慰霊碑に花を手向け、祈りをささげた。「殺してくれ」と叫んでいた父の姿が忘れられない。広島市中区の足利美保子さん（50）の父は兵隊として被爆し、約一カ月後に下痢が続いて亡くなった。父の苦しみを思い「平和が続いてほしい」と慰霊碑に祈った。身元が分からない遺骨が多数納められた供養塔。両親と四人のきょうだいの骨は見つからない。「七十年じやろうが、八十年じやろうが、心の中にひびいていく。終わりはない」。

### 式典 平和祈る遺族

同市東区の長井弘さん（60）はつぶやいた。「ここに眠っている」と言い聞かせ、毎年参ってきた。この日も、手を合わせ祈った。「二度とないようにするから安らかに眠ってください」。照りつける日差しの中、つかの間の涼しさを感じさせる風が吹いた。響き対策のため白いテントがずらりと並び、霧状の水をまくミストシャワーも。投下時刻に合わせた黙とうで、女性は遺影を抱いてこうへを垂れた。一方「戦争法案反対」とのデモの音が響き、安倍晋三首相のあいさつに「帰れ」などのヤジも上がった。

八月六日の朝は、家から電車で一時間ほどかかる学徒動員先の塗料工場にいた。朝礼中に空が真っ暗になり、すぐに「広島で大変なことがあったらしい」と大騒ぎになった。線路沿いに歩いて広島に戻る途中、衣服が焼けただれ、「みずー、みずー」と訴える人たちががらからと逃げてきた。街中に入る、全身にガラスが突き刺さったり、ひどいやけどを負ったりした人でごった返し、道そのまじりに遺体が転がっていた。「お母さんはきつと苦しむにすんだんだよね。良かったね」。検視調査のコピーを胸の前で優しく抱きしめると、涙が止まらなくなった。母の命を奪った原爆は絶対に許すことができない。式典後、平和記念公園にある慰霊碑の前に立ち、あらためて思う。「人間の力で制御できない原子力を扱ったことは神様を冒瀆すること。この世からあらゆる核をなくしてほしい」（浅井俊典）